

葛飾砂子

泉鏡花作

\*\*\*\*\*

目次

縁日 えんにち

柳行李 やなぎこうり

橋ぞろへ はし

題目船 だいもくぶね

衣の雫 ころもしじく

淺緑 あさみどり

記念ながら かたみ

\*\*\*\*\*

先年尾上家の養子で橘之助といった名題俳優が、  
 年紀二十有五に満たず、肺を煩ひ、餘り胸が痛いから  
 白菊の露が飲みたいといふ意味の辭世の句を残して  
 儂うなり、鬚眉の人々は謂ふまでもなく、見巧者  
 をはじめ、藝人の間にも、あはれ梨園の眺め唯一  
 の、白百合一つ萎んだりと、聲を上げて惜しみ悼ま  
 れたほどのことである。

深川富岡門前に待乳屋と謂つて三味線屋があり、  
 其の一人娘で菊枝といふ十六になるのが、秋も末方  
 の日が暮れてから、つい近所の不動の縁日に詣ると  
 いつて出たのが、十時半過ぎ、彼是十一時に近く、戸  
 外の人通もまばらになつて、未だ歸つて來なかつた。  
 別に案ずるまでもない、同町の軒ならび二町ばか  
 り洲崎の方へ寄つた角に、淺草紙、束藁、懷爐灰、  
 蚊遣香などの荒物、烟草も封印なしの一錢五厘二錢  
 玉、ばいれつと、ひーろー位な處を商ふ店がある、  
 眞中が抜裏の路地になつて合角に格子戸造の仕舞家

が一軒。

江崎とみ、と女 名前、何でも持つて来いといふ  
意氣造だけれども、此の門札は、然る類の者の看板  
ではない、とみと謂ふのは方違ひの北の廓、京町と  
やらの然る樓に、博多の男帯を後から廻して、前で  
挟んで、ちよこなんと坐つて抜衣紋で、客の 懐中  
を上目で見る所謂新造なるもので。

三十の時から二階三階を押し廻して、五十七の今年  
二十六年の間、遊女八人の身拔をさしたと大威張の  
腕だから、家作などはわがものにして、三月ばかり  
前までは、出稼の留守を勤め上りの圍物、之は洲崎  
に居た年増に貸してあつたが、其の婦人は、此の夏、  
辨天町の中通に一軒引手茶屋の賣物があつて、買つ  
て貰ひ、商賣をはじめたので空家になり、又た貸札  
でも出さうかといふ處へ娘のお縫。母親の富とは大  
違ひな殊勝な心懸、自分の望みで大學病院で仕上げ、  
今では町住居の看護婦、身綺麗で、容色も佳くつて、  
ものが出来て、深切で、優しいので、寸暇のない處  
を、近ごろの彼の尾上家に頼まれて、橘之助の病  
辱に附添つて、息を引き取るまで世話をしたが、多  
分の禮も手に入るゝ、山そだちは山とか、些と看病

疲も出たので、暫く保養をすることにして歸つて來て、丁度留守へ入つて獨で居る。菊枝は前の圍者が居た時分から、縁あつて一寸々々遊びに行つたが、今のお縫になつても相變らず、・・・屹とだと、兩親が指圖で、小僧兼内弟子の彌吉といふのを迎に出ずことにした。

「菊枝が毎度出ましてお邪魔様でございます、難有う存じます。それから菊枝に、病氣揚句だ、夜更しをしては宜くないからお歸りと慥う言ふのだ。汝またかりん糖の假色を使つて口上を忘れるな。」

坐睡をして居たのか、寐惚面で承るとむつくと立ち、おつと合點お茶の子で飛出した。

わつしよい／＼と謂ふ内に駈けつけて、

「今晚は。」といふと江崎が家の格子戸をがらりと開けて、

「今晚は。」

時に返事をしなかつた、上框の障子は一枚左の方へ開けてある。取附が三疊、次の間に灯は點いて居た、彌吉は土間の處へ突立つて、委細構はず、

「へい毎度出ましてお邪魔様でございます、有難う存じます。え、菊枝さん、姉さん。」

「菊枝さん、」と又た呼んだが、誰も返事をするものがない。

立續けに、

「遅いから最うお歸りなさいまし、風邪を引くと不可ません。」

彌吉は親方の吩咐に註を入れて、我ながら旨く言つたと思つたが、其でも猶應じないから、土間の薄暗い中をきよろ／＼とニしたが、密と、框に手をついて、及腰に、高慢な顔色で内を透し、

「かりん糖でござい、評判のかりん糖！」と節をつけて、

「雨が降つてもかり／＼ッ、」

甚ニものだ、之ならば顕れよう、彌吉は菊枝とお縫とが居ない振でかつぐのだと思ふから、笑ひ出すか、噴き出すか、くす／＼遣るか、叱るか、ニヤ／＼獨で笑ひながら、耳を澄したけれども沙汰がない、時計の音が一分づゝ柱を刻んで、潮の退くやうに鐵瓶の沸え立つ響、心付けば人氣勢がしないのである。

「可笑しいな、」と獨言をしたが、念晴しに最う一ツ喚いて見た。

「へい、かりん糖でござい。」

其でも寂寞、氣の所為か灯も陰氣らしく、立つて土間は暗いから、嚏を仕損なつたやうな變な目色で彌吉は飛込んだ時とは打つて變り、些と悄氣た形で格子戸を出たが、後を閉めもせず、其まゝには歸らないで、溝傳ひに丁度戸外に向つた六疊の出窓の前へ來て、背後向に倚り懸つて、前後をニして、茫乎する。

ぐわら／＼と通つたのは三臺ばかりの威勢の可い腕車、中に合乗が一臺。

「えゝ、驚かしやあがるな。」と年紀には肖ない口を利いて、大福餅が食べたさうに懷中に手を入れて、貧乏ゆるぎといふのを行る。

處へ入亂れて三四人の聲音、聲高にものを言ひ合ひながら、早足で近いて、江崎の前へ來ると一寸淀み、

「何うもお嬢さん難有うございました。」恚ういつたのは豆腐屋の女房で、

「飛んだお手數でしたね。」

「お蔭様だ。」と留といふ紺屋の職人が居る、魚  
勘の親仁が居る、いづれも口々。

中に挟つたのが看護婦のお縫で、

「何ういたしまして、誰方も御苦勞様、御免なさ

いえし。」

「然様なら。」

「お休み。」

互に言葉を交したが、連の三人は其なり分れた。

一寸イんで見送るが如くにする、お縫は縞物の不  
着に帯をお太鼓にちやんと結んで、白足袋を

穿いて居るさへあるに、髪が夜會結。一體ちよん髷

より夏冬の帽子に目を着けるほどの、土地柄に珍し

い扮装であるから、新造の娘とは知つて居ても、稱

へるにお嬢様を以てする。

お縫は出窓の處に立つて居る彌吉には目もくれず、  
踵を返すと何か忙しらしく入らうとしたが、格子も

障子も突抜けに開ツ放し。

思はず猶豫つて振返つた。

「お歸んなさい。」

「おや、待乳屋さんの、」と唐突に驚く間もあら  
せず、

「菊枝きくえさんは何どうしました。」

「お歸かへんなすつたんですか。」

聊いさか見當けんたうが違ちがつて居ゐる。

「病氣びやうき揚句あげくだしもうお歸かへんなさいつて、へい、迎むかひに來きたんで。」

「何どうかなさいましたか。」と深切しんせつなものいひで、門口かどぐちに立たつて尋たづねるのである。

小僧こぞうは息いきをはずませて、

「一所しよに出懸でかけたんぢやあないの。」

「否いゝえ。」



柳行李

三

「へい、をかしいな、だつて内にやあ居ませんぜ。」

「何居ないことがありますか、かつがれたんでせう、呼んで見たのかね。」

「呼びました、喚いたんで、かりん糖の假聲まで使つただけれど。」

お縫は莞爾して、

「そんな串戯をするから返事をしないんだよ。まあお入んなさい、御苦勞様でした。」と落着いて格子戸を潜つたが、土間を透すと緋の天鵝絨の緒の、小町下駄を揃へて脱いであるのに屹と目を着け、

「御覧、履物があるぢやあないか、何を慌てゝるんだね。」

彌吉は後について首を突込み、

「や、其奴あ氣がつかなくつたい。」

「今日はね河岸へ大層着いたさうで、鮪の鮮しいのがあるからお好きな赤いのをと思つて菊ちゃんを一人ぼつちにして、

角の喜の字へ行くとね、歸りがけにお前、「と口早に話しながら、お縫は上 框の敷居の處で一寸屈み、件の履物を揃へて、

「何なんですよ、蘆の湯の前まで來ると大勢立つてるんでせう、恐しく騒いでるから聞いて見ると、銀次さん許の、あの、刺青をしてるお婆さんが湯氣に上つたといふものですから、世話をしてね、何うもお待遠様でした。」

と、襖を開けて其の六疊へ入ると誰も居ない、お縫は少しも怪しむ色なく、

「堪忍して下さい。だもんですから、」ずっと、長火鉢の前を悠々と斜に過ぎ、帯の間へ手を突込むと小さな蝦蟇口を出して、ちやら／＼と單笥の上に置いた。門口の方を透して、

「小僧さん、まあお上り、菊枝さん、きいちちゃん。」

と言つて部屋の内をニすと、ぼん／＼時計、花瓶の菊、置床の上の雑誌、貸本が二三冊、それから自分の身體が單笥の前にあるばかり。

はじめて怪訝な顔をした。

「おや、きいちちゃん。」

「居やあしねえや。」と彌吉は腹ン這になつて、覗

いて居る。

「彌吉どん。本當に居ないですか、菊ちゃん。」とお縫は單笥に凭懸つたまゝ、少し身を引いて三寸ばかり開いて居る襖、寐間にして置く隣の長四疊の其の襖に手を懸けたが、此處に見えなければ愈々菊枝が居ないのに極るのだと思ふから、氣がさしたと覺しく、猶豫つて、腰を据ゑて、筋の緊つて來る眞顔は寂しく、お縫は大事を取る鹽梅に密と押開けると、唯中古の疊なり。

「あれ、」といひさま束々と入つたが、慌しく、小僧を呼んだ。

「おつ、」と答へて彌吉は突然飛込んで、

「何う、何う。」

「お待ちなさいよ、否ね、彌吉どん、お前來る途中で蓬違ひはしないだらうね、履物はあるし、それにしちやあ、」

呼び上げて置きながら取留めたことを尋ねるまでもなく、お縫は半ば獨言。蓋のあいた柳行李の前に立膝になり、一寸小首を傾けて、向うへ押して、ころりと、仰向けに蓋を取つて、右手を差し入れ、て底の方から擡げて見て、其の手を返して、疊んだ

着物を上から二ツ三ツ壓へて見た。

「お嬢さん、盗賊？」と彌吉は耐りかねて頓興な聲を出す。

「待つて頂戴。」

お縫は自らおのが身を待たして、蓋を引いたまゝじつとして勝手許に閉つて居る一枚の障子を、其の情の深い目でニめたのである。

四

「彌吉どん。」

「へい、」

「おいで、」と言ふや否や、ずいと立つて件の臺所の隔ての障子。柱に掛つて覗いたから、何處へお

いでることやらと、彌吉はうろ／＼する内に、お縫は裾を打つて、ばた／＼と例の六疊へ取つて返した。

兩三度彼方此方、ものに手を觸れて廻つたが、臺洋燈を手に取るとやがて又た臺所。

其の袂に觸れ、手に觸り、寄つたり、放れたり、筋違に退いたり、背後へ出たり、附いて廻つて彌吉は、きよろ／＼、目ばかり煌かして黙然で。

お縫は額さきに洋燈を捧げ、血が騒ぐか細おもての顔を赤うしながら、お太鼓の帯の幅つたげに、後姿で、ずつと臺所へ入つた。

と思ふと、濕ツ氣のする冷い風が、颯と入り、洋燈の炎尖が下伏になつて、ちらりと蒼く消えようとする。

はつと袖で圍つてお縫は屋根裏を仰ぐと、引窓が開いて居たので、煤で眞黒な壁へ二條引いた白い繩

を、ぐいと手繰ると、かたり。

引窓の閉まる拍子に、物音もせず、五分ばかりの丸い灯は、口金から根こそぎ殺いで取ったやうに火屋の外へふツとなくなる。

「厭だ、消しちまつた。」

勝手口は見通しで、二十日に近い路地の月夜、何うしたらう、此處の戸は閉つて居らず、右に三軒、左に二軒、兩側の長屋は最う夜中で、明い屋根あり、暗い軒あり、影は溝板の處々、其家も此處も寂寥して、唯一つ朗かな蚯蚓の聲が月でも聞くと思ふのか、鳴いて居る。

此の裏を行抜けの正面、霧の綾も遮らず目の届く處に角が立つた青いものゝ散つたのは、一軒飛離れて海苔粗朶の垣を小さく結つた小屋で剥く貝の殻で、其の剥身屋のうしろに、薄霧のかゝつた中は、直ちに汽船の通ふ川である。

ものゝ景色はこれのみならず、間近な軒の此方から棹を渡して、看護婦が着る眞白な上衣が二枚、了ひ忘れたのが夜干になつて懸つて居た。

「お化。」

「あゝ、」とばかり、お縫は胸のあたりへ颯と月を

浴<sup>あ</sup>びて、さし入<sup>い</sup>る影<sup>かげ</sup>のきれ／＼な板<sup>いた</sup>敷<sup>じき</sup>の上<sup>うへ</sup>へ坐<sup>すわ</sup>つて  
了<sup>しま</sup>ふと、  
「灯<sup>あかり</sup>を消<sup>け</sup>しましたね。」とお化<sup>ばけ</sup>の暢<sup>のん</sup>氣<sup>き</sup>さ。

橋ぞろへ

五

「さあ、おい、起きないか、石見橋は最う越した、不動様の前あたりだよ、直に八幡様だ。」と、縞の羽織で鳥打を冠つたのが、胴の間に圓くなつて寐て居る黒の紋着を揺り起す。

一行三人の乗合で端に一人仰向けになつて舷に肱を懸けたのが調子低く、

佃々と急いで漕げば、

潮がそこりて櫓が立たぬ。

と口吟んだ。

けれども實際此の船は佃をさして漕ぐのではない。且つ潮がそこる處の沙汰ではない。晝過からからりと晴上つて、蛇の目の傘を乾かすやうな月夜になつたが、昨夜から今朝へかけて暴風雨があつたので、大川は八分の出水、當深川の川筋は、縦横曲折する處、潮、満々と湛へて居る、而して早船乗の頬冠をした船頭は、恚る夜のひっそりした水に聲を立てて櫓をぎいーぎい。



砂利船、材木船、泥船などを犇々と纜つてある蛤町の河岸を過ぎて、左手に黒い板圍ひ、（サ）（大）（山）と大きく胡粉で書いた、中空に見上げるやうな物置の並んだ前を通つて、蓬萊橋といふのに懸つた。

月影に色ある水は橋杭を巻いてちら／＼と、蛭つて、横堀に浸した數十本の材木が皆動く。

「とつさん此處いらで、能く釣つてるが何が釣れる。」

船頭、

「沙魚に鰯子が釣れます。」

「おぼこならば釣れよう。」と縞の羽織が笑ふと、舷に肱をついたのか向直つて、

「何あてになるものか。」

「遣つて御覧じろ。」と橋の下を抜けると、忽ち川幅が廣くなり、土手が著しく低くなつて、一杯

の潮は凸に溢れるやう。左手は洲の岬の蘆原ま

で一望縹たる廣場、船大工の小屋が飛々、離々たる

原上の秋の草。風が海手からまともに吹きあてるの

で、満潮の河心へ乗つてるやうな船は此處に於て大

分揺れる。

「釣れる段か、こんな晩にやあ鰻が船の上を渡り越すといふ位な川ぢや。」と船頭は意氣頗る昂る。

「さあ、心細いぞ。」

「一體此の川は何といふ。」

「名はねえよ。」

「何とかありさうなものだ。」

「石見橋なら石見橋、蓬萊橋なら蓬萊橋、蛤町

の河岸なら蛤河岸さ、八幡前、不動前、之が富

岡門前の裏になります。」といふ時、小曲をして平

清の植込の下なる暗い處へ入つて蔭になつた。川面

は益々明い、船こそ数多あるけれども動いて居るの

は此の川に之唯一艘。

「此方の橋は。」

間近く虹の如く懸つて居るのを縞の羽織が聞くと、

船頭の答へるまでもなく紋着が、

「汐見橋。」

「寂しいな。」

此の處の角にして船が弓なりに曲つた。寐息も聞

えぬ小家數多、水に臨んだ岸にひよろ／＼とした細

くつて低い柳が恰も墓へ手向けたもののやうに果敢

なく植わつて居る。土手は一面の蘆で、折しも風立

つて来たから颯と靡き、颯と靡き、  
方へ漕いでノ、進んだが、白珊瑚の枝に似た貝殻だ  
らの海苔粗朶が堆く棄ててあるのに、根を隠  
して、薄ら蒼い一基の石碑が、手の届きさうな處に  
人の背よりも高い。

「お、氣味悪い。」と 舷を左へ坐りかはつた  
縞の羽織は大いに悄氣する。

「とつさん、何だらう。」

「これかね、寛政 子年の津浪に死骸の固つて居た  
處だ。」

正面に、

葛飾郡、永代築地。

と雋りつけ、おもてから背後へ草書をまはして、  
此處寛政三年波あれの時、家流れ人死するもの少か  
らず、此の後高波の變はかりがたく、溺死の難なし  
といふべからず、是に寄りて西入船町を限り、東  
吉祥寺前に至るまで凡そ長さ二百八十間餘の所、家  
居取拂ひ空地となし置くものなり。

と記して 傍に、

寛政六年甲寅十二月 日とある石の記念碑である。

「ほう、水死人の、然うか、謂はば土左衛門塚。」

「おつと船中にて然やうなことを、」と鳥打はつ  
むりを竦めて、

「や！」

響くは凄じい水の音、神川橋の下を潜つて水門を抜けて矢を射る如く海に注ぐ流の聲なり。

「念入だ、恐しい。」と言ひながら、寢返の足で船底を蹴つたばかりで、未だに生死のほども覺束ないほど寐込んで居る連の男を此の際、十萬の味方と烈しく揺動がして、

「起きないか／＼、酷く身に染みて寒くなつた。」

やがて平野橋、一本二本蘆の中に交つたのが次第に洲崎の此の邊、土手は一面の薄原、穂の中がら二十日近くの月を遠く沖合の空に眺めて、潮が高いいから、人家の座敷下の手すりとすれ／＼の處をゆらりと漕いだ、河岸についてるのは川蒸汽で縦に七艘ばかり。

「此處でも人ツ子を見ないわ。」

「其でも些とは娑婆らしくなつた。」

「娑婆といやあ、とつさん、此邊で未通子は何うだ。」と縞の先生活返つていやごとを謂ふ。

「何うだ處が、もしお前さん方、此の加賀屋ぢや水から飛込む魚を食べさせるとつて名代だよ。」

「先づ其處らで可し、船がぐら／＼と來て鰻の川渡りは御免蒙る。」

「此處では欄干がら這込ます。」

「まさか。」

「いや何ともいへない、青山邊ぢやあ三階へ栗が飛込むぜ。」

「大出来！」

船頭も哄と笑ひ、又、

佃々と急いで漕げば、

潮がそこりて櫓が立たぬ。

程なく漕ぎ寄せたのは辨天橋であつた、船頭は舳へ乗かへ、棹を引いて横づけにする、水は船底を嘗めるやうにさら／＼と引いて石垣へだぶり。

「當りますよ。」

「活きてるか、これ、」

二度まで揺られても人心地のないやうだつた一名は、此時わけもなくむつくと起きて、眞先に船から出たのである。

「待て、」といひつゝ兩人、懐をおさへ、褌を合せ、羽織の紐をしめなどして、履物を穿いてばた／＼と陸へ上つて、一團になると三人へルビルビいゝ一言ひ合せたやうに、

「寒い。」

「お静に。」といつて、船頭は何か取らうとして胴

の間の處へ俯向く。

途端であつた。

耳許にドンと一發、船頭も驚いてしやつきり立つと、目の前へ、火花が絲を引いてニと散つて、川面で消えたのがニツ三ツ、不意に南京火花を揚げたのは寐て居た彼の男である。

齊しく左右へ退いて、呆氣に取られた連の兩人を顧みて、呵々と笑つてものをもいはず、眞先に立つて、

鞭聲 肅々！ ー ー ー

「何ぢやい。」と打棄つたやうに忌々しげに呟いて、  
 頬冠を取つて苦笑をした、船頭は年紀六十ばかり、  
 痩せて目鼻に角はあるが、一癖も、二癖も、額、眦  
 、口許の皺に隠れてしをらしい、胡麻鹽の禿頭、  
 見るから佛になつてゐるのは佃町のはづれに獨住居  
 の、七兵衛といふ親仁である。  
 七兵衛——此の船頭ばかりは、仕事の了にも早船を  
 此處へ繋いで戻りはせぬ。  
 毎夜、辨天橋へ最後の船を着けると、後へ引返し  
 て彼の石碑の前を漕いで、蓬萊橋まで行つて其の岸  
 の松の木に纜つて置いて上るのが例で、風雨の烈し  
 い晩、休む時はさし措き、年月夜毎に屹とである。  
 且つ仕舞船を漕ぎ戻すに當つては名代の信者、法  
 華經第十六壽量品の偈、自我得佛來といふはじめ  
 から、速成就佛身とあるまでを幾度となく繰返す。  
 連夜の川施餓鬼は、善か悪か因縁があらうと、此の  
 邊では噂をするが、十年は一昔、二昔も前から七兵



衛を知つてるものも別に仔細といふほどのことを見  
出さない。本人も語らず、又恚る善根功德、人が咎  
める處の沙汰ではない、固より起居に念佛を唱へる  
者さへある、船で題目を念ずるに仔細は無からう。

然れば今宵も例に依つて、船の舳を乗返した。

腰を捻つて、櫓柄を取つて、一ツおすと、岸を放  
れ、

「あ、良い月だ、妙法蓮華經 如來壽量 品第十

六自我得佛來、所經 諸劫數、無量 百 千萬億載

阿僧祇、」と誦しはじめた。風も静に川波の聲も聞

えず、更け行くにつれて、三押に一度、七押に一度、

兔もすれば響く櫓の音かな。

「常説 法教化無數億衆生 爾來無量劫。

法の聲は、蘆を渡り、柳に音づれ、蟋蟀の鳴き細

る人の枕に近づくのである。

本所ならば七不思議の一ツに數へよう、月夜の題

目船、一人船頭、界限の人々はそもいかんの感を起

す。苦家、伏家に 灯の影も漏れない夜は然こそ、

朝々の煙も細く彼の柳を手向けられた墓の如き屋根

の下には、子なき親、夫なき妻、乳のない嬰兒、盲

目の媪、繼母、寄合身上で女ばかりで暮すなど、哀

に果敢ない老若 男女が、見る夢も覺めた思ひも、  
大方此の日照る世の中のことではあるまい。

髯ある者、腕車を走らす者、外套を着たものなどを、同一世に住むとは思はず、同胞であることなどは忘れて了つて、憂きことを、憂しと識別することさへ出来ぬまで心身ともに疲れ果てた其家此家に、  
慙くまでに尊い音楽はないのである。

「衆生既信伏質 直意柔軟、一心 慾見佛、不自惜  
身命、」と親仁は月下に小船を操る。

諸君が髓處、淡路島通ふ千鳥の戀の辻占といふのを聞かると時、七兵衛の船は石碑のある處へ懸つた。  
いかなる人が慙ういふ時、此の聲を聞くのであるか？  
こゝに適例がある、富岡門前町の彼のお縫が、世話をしたと謂ふから、菊枝のことについて記すのに些とも縁がないのではない。

幕府の時分旗本であつた人の女で、唯ある樓に身を沈めたのが、此の近所に長屋を持たせ 廓 近くへ引取つて、病身な母親と、長 煩 で腰の立たぬ父親とを賣いで居るのがあつた。

少なからぬ借金で、差引かれるのが多いのに、  
 稼高の中から渡される小遣は髪結の祝儀にも足り  
 ない、ところを、譬ひおも湯にしる兩親が口を開け  
 て其の日其の日の仕送を待つのであるから、一月と  
 纏めて纏ばかりの額ではないので、毎々借越にのみ  
 なるのであつたが、暖簾名の婦人と肩を並べるほど  
 賣れるので、内證で悪い顔もしないで無心に應じて  
 は居たけれども、應ずるは賣れるからで、賣るのに  
 は身を以て勤めねばならないとか。

如何に孝女でも悪所に於て斟酌があらうか、段々身  
 體を衰へさして、年紀は未だ二十二といふのに全盛  
 の色もやゝ褪せて、素顔では、と源平の輩に遠慮を  
 するやうになると、二度三度、月の内に枕が上らな  
 い日があるやうになつた。

扱帯の下を氷で冷すばかりの容體を、新造が枕頭に  
 取詰めて、此の位なことで半日でも客を斷るといふ  
 ことがありますが、死んだ浮舟なんざ、手拭で汗を  
 拭く度に肉が殺げて目に見えて手足が細くなつた、  
 其さへ我儘をさしちやあ置きませなんだ、貴女は御

全盛のお庇に、と小刀針で自分が使う新造にまで倅  
ることを言はれながら、之には又た立替へさしたの  
が、控帳についてるので、悔しい口も返されない。  
といふ中にも、髓分氣の確な女、むづかしく謂へ  
ば意地が強いといふ質で、泣かないが蒼くなる風だ  
つたさうだから、辛抱はするやうなものの、手元が  
詰るに從うて謂ふまじき無心の一つもいふやうに  
なると、さあ鱈は遁る、鰻は、すべる、お玉杓子は  
吃驚する。

河岸は不魚で、香のある鯛なんざ、廓までは廻ら  
ぬから、次第々々に隙にはなる、融通は利かず、寒  
くはなる、又暑くはなる、年紀は取る、手拭は染め  
ねばならず、夜具の皮は買はねばならず、裏は天地  
で間に合つても、襠の色は變へねばならず、茶は  
切れる、時計は留る、小間物屋は朝から来る、朋輩  
は落籍のがある、内證では小兒が死ぬ、書記の内へ  
水がつく、幫間がはな會をやる、相撲が近所で興行  
する、それ目録だわ、つかひものだ、見舞だと、つ  
きあひの雑用を取るだけでも、痛む腹のいひわけは  
出来ない仕誼。

髓分其までも彼是と年季を増して、二年あまり

の地獄の苦がフイになつて居る上へ、最う切迫と二十圓。

盆のことで、両親の小屋へ持つて行つて、ものをいふ前に先づ、お水を一口といふ息切のする女が、到底も不可ません、濟ないこつてすがせめてお一人だけならばと、張も意氣地もなく母親の帯につかまつて、別際に忍泣に泣いたのを、寐て居ると思つた父親が聞き取つて、女が歸つて明くる日も待たず自殺した。

報知を聞くと齊しく、女は顔の色が變つて目が窪んだ、それなりけり。砂利へ寐かされるやうな蒲團に倒れて、乳房の下に骨が見える煩ひ方。

肺病のある上へ、驚いたが機かけとなつて心臓を痛めたと、醫者が匙を投げてから内證は證文を巻いた、但し身附の衣類諸道具は編笠一蓋と名づけて之をぶつたくり。

手當も出来ないで、唯川のへりの長屋に、其でも日の目が拝めると、北枕に水の方へ黒髪を亂して倒れて居る、恚る者の夜更けて船頭の讀經を聞くのは、どんなに悲しからう、果敢なからう、情なからう、又た嬉しからう。

「妙法蓮華經如來壽量品第十六自我得佛來所經  
諸劫數無量百千萬億載阿僧祇。」と誦するのが、  
いふべからざる一種の福音を川面に傳へて渡つた、  
七兵衛の船は七兵衛が乗つて漂々然。

蓬萊橋は早や見える、折から月に薄雲がかゝつたので、野も川も、船頭と船とを淡く残して一面に白み渡つた、水の色は殊にやゝ濁を帯びたが、果もなく洋々として大河の如く、七兵衛はさながら棲息して呼吸するものがない、月世界の海を渡るに齊しい。「妙法連華經如來壽量品。」と繰返したが、聞くものゝ魂が舷のあたりにさまよふやうな、ものゝ怪が絡つたか。烏が二聲ばかり鳴いて通つた。七兵衛は空を仰いで、

「曇つて来た、雨返しがありさうだな、自我得佛來所經、」となだらかに又た頓著しない、すべてのものを忘れたといふ音調で誦するのである。

船は水面を横に波状動を起して、急に烈しく揺れた。

讀經をはたと留め、

「やあ、やあ、かしが、」と呟きざま臚を左へ漕ぎ開くと、二條糸を引いて斜に描かれたのは電の裾に似たる綾である。

七兵衛は腰を撓めて、突立つて、逸疾く一間ばかり

り遣違へに川下へ流したのを、振返つてじつと瞞め、  
「お客様だぜ、待て、妙法蓮華經如來壽量品第  
十六。」と忙しく張上げて念じながら、舳を輪なり  
に、迂らして中流で逆に戻して、一息ぐいと入れる  
と、小波を打亂す薄月に影あるものが近いて、やが  
て舷にすれ／＼になつた。

飛下りて、胴の間に膝をついて、白髪天頭を左右  
に振つたが、突然水中へ手を入ると、朦朧として  
白く、人の寢姿に水の懸つたのが、一揺静に揺れて、  
落着いて二三尺離れて流れる、途端に思ふさま半身  
を乗出したので反對の側なる舷へざぶりと一波  
浴せたが、あはよく手先がかゝつたから、船は人と  
ともに寄つて死骸に密接することになつた。

無意識に今掴んだのは、丁度折曲げた眞白の肱の、  
鍵形に曲つた處だつたので、

「しやつちこばツたな、此奴あ日なした。」  
と其まゝ亂暴に引上げようとすると、少しく水を  
放れたのが、柔かに伸びさうな手筈があつた。

「どツこい。」驚いて猿臂を伸し、親仁は仰向い  
て鼻筋に皺を寄せつつ、首尾よく肩のあたりへ押廻  
して、手を潜らし、掻い込んで、ずぶ／＼と流を切



つて引上げると、びつしより 舷へ胸をのせて、  
俯向けになつたのは、形も崩れぬ美しい結綿の島田  
鬘。身を投げて程も無いか、花がけにした鹿の子の  
切も、沙魚の口へ銜へ去られないで、解けて頸から  
頬の處へ、血が流れたやうにベツとりとついで居る。  
親仁は流に攫はれまいと、両手で、其の死體の半  
は未だ水に漂つて居るのを緊乎 押へながら、わな  
／＼と震へて早口に經を唱へた。

けれども之は恐れたのでも 驚いたのでもなかつ  
たのである。助かるすべもありさうな、見た處の一  
枝の花を、いざ船に載せて見て、咽喉を突かれてど  
も、居はしまいか、鳩尾に斬つたあとでもあるまい  
か、弗と愛情の念盛に、望の絲に縋りついたから、  
危ぶんで、七兵衛は胸が轟いて、慈悲の外何の色を  
も交へぬ老の眼は塞いだ。

又もや念ずる法華經の偈の一節。

やがて曇つた夜の色を浴びながら満水して濁つた  
川は、どんと船を突上げたばかりで、忘れたやうに  
其の様を七兵衛の手に残して、何事もなく流れ流  
るゝ。

十

待乳屋まちやの娘むすめ 菊枝きくえは、不動ふどうの縁日えんにちにといつて内うちを出でた時とき、澤山たくさんある髪かみを結綿ゆひわたに結ゆつて居あた、角絞つしぼりの鹿かの子この切きれ、浅黄あさぎと赤あかと二筋すぢを花はながけにして之これが晝過ひるすぎに出で来たきので、衣服きものは薄うすお納戸なんとの棒縞ぼうしま絲織いとおりの裕あわせ、薄うす紫むらさきの裾廻すそまはし、唐繻子たうじゆすの襟えりを掛かて、赤地あかぢに白菊しらぎくの半襟はんえり、緋鹿ひがの子この腰巻こしまき、朱鷺色とぎいろの扱帯ししきをきりノ、と巻まいて、萌葱もえぎ繻子じゆすと緋ひの板いたじめ縮緬ちりめんを打合うちあせの帯おび、結目むすびめを小ちひさく、心しんを入いれないで帯上おびあげは赤あかの菊五郎きくごろう格子がうし、帯留おびどめも赤あかと紫むらさきとの打交うちまぜ、素足すあしに小町下駄こまちげたを穿はいてからノ、と家うちを。

一體たいしや三味線屋みせんやで、家業柄かげがら出入ではひものにつけても、兩りやう親しんは派手はで好ずきなり、殊ことに鼻肩ひいきやくしや俳優きつの助すけの死しんだことことを聞きいてから、始し終じゆうくよノ、として、暫しばいく煩わづつてまで居あたのが、其日そのひは誕生たんじやうび日ひで、氣分きぶんも平日いっになく好いいといふので、髪かみも結ゆつて一枚まい着換きかへて出でたのであつた。

小町下駄こまちげたは、お縫ぬいが許とこの上あがり 框かまちの内うちに脱ぬいだまノ

で居なくなつたのであるから、身を投げた時は跣足であつた。

履物が無かつたばかり、髪も壊れず七兵衛が船に助けられて、夜があけると、其扱帯も其の帯どめも、お納戸の袷も、萌葱と緋の板じめの帯も、荒繩に色を亂して、一つも残らず、七兵衛が臺所にずらりと懸つて未だ雫も留まらないで、引窓から朝霧の立ち籠む中に、しと／＼と落ちて、一面に朽ちた板敷を濡して居るのは潮の名残。

可惜、鼓のしらべの緒にでも干す事が、繩を以て一方から引窓の紐にかけ渡したのは無慙であるが、親仁が心は優しかつた。

引窓を開けたばかり故と勝手の戸も開けず、門口も閉めたまゝで、鍋をかけた七輪の下を煽ぎながら、大入だの、曆だの、姉さんだのを張交ぜにした二枚折の枕、屏風の中を横から振向いて覗き込み、姉や、気分は何うぢやの、少し何かゞ解つて来たか、

と的面に此方を向いて、眉の優しい生際の濃い、鼻筋の通つたのが、何も思はないやうな、然も限りなき思を籠めた鈴のやうな目を睜つて、瓜核形の顔

ばかり出して寝て居るのを視めて、大口を開いて、  
「あは、あんな顔をして罪のない、未だ夢ぢやと  
思ふさうだ。」

菊枝は、硫黄ヶ島の若布の如き檻襖蒲團にくるまつ  
て、抜綿の丸げたのを枕にして居る、これさへぢか  
づけであるのに、親仁が水でも吐した故か、船へ上  
げられた時よりは髪がひつ潰れて、今もびつしより  
で哀である、昨夜は此の雫の垂るゝ下で、死際の蟋  
蟀が鳴いて居た。

七兵衛はなほしをらしい目から笑を溢して、  
「やれ、綺麗な姉さんが臺なしになつたぞ。あて  
こともねえ、何うぢや、切ないかい、何處ぞ痛みは  
せぬか、お肚は苦しうないか。」と自分の胸を頑固  
な握拳でこツ、と叩いて見せる。

ト可愛らしく、口を結んだまゝ、漸う此の時頭を  
振つた。

「は、は、痛かあない、宜いな、嬉しいな、可し、  
可し、そりや、恚うぢやて、お前、飛込んだ拍子に  
突然目でも廻したか、いや、水も少しばかり、井  
に一杯吐いたか吐かぬぢや。大したことはねえでの、  
氣さへ確になれば整然と治る。それからの、此處は

大事<sup>だいじ</sup>ない處<sup>ところ</sup>ぢや、婆<sup>ばあ</sup>も猫<sup>ねこ</sup>も犬<sup>いぬ</sup>も居<sup>を</sup>らぬ、私<sup>わし</sup>一人<sup>ひとり</sup>ぢや  
から安<sup>あん</sup>心<sup>しん</sup>をさつしやい。また何<sup>ど</sup>んな仔<sup>し</sup>細<sup>さい</sup>がないとも  
限<sup>かぎ</sup>らぬが、少<sup>すこ</sup>しも氣<sup>き</sup>遣<sup>つかひ</sup>はない、無<sup>む</sup>理<sup>り</sup>に助<sup>たす</sup>けられたと  
思<sup>おも</sup>ふと氣<sup>き</sup>が揉<sup>も</sup>めるわ、自<sup>し</sup>然<sup>ぜん</sup>天<sup>てん</sup>然<sup>ねん</sup>と活<sup>いき</sup>返<sup>かへ</sup>つたと恚<sup>いか</sup>うす  
るだ。可<sup>い</sup>いか、活<sup>いき</sup>返<sup>かへ</sup>つたら夢<sup>ゆめ</sup>と思<sup>おも</sup>つて、目<sup>め</sup>が覺<sup>さ</sup>めた  
ら、「といひかけて、品<sup>ひん</sup>のある涼<sup>すず</sup>しい目<sup>め</sup>を又<sup>また</sup>た凝<sup>みつ</sup>視<sup>つ</sup>  
め、

「これさ、もう夜<sup>よ</sup>があけたから夢<sup>ゆめ</sup>ではない。」

暫くして菊枝が細い聲、

「もし、」

「や、産聲を擧げたわ、さあ、安産、安産。」と嬉しさに乗出して膝を叩く。しばらくして、

「此處は何處でございますえ。」とほろりと泣く。

七兵衛は笑傾け、

「旨いな、涙が出れば此方のものだ、姉や、些とは落着いたか、氣が静まつたか。」

「此處は何方でせう。」

「む、此處はな、む、」と獨でほく／＼。

「散々氣を揉んでお前、漸々此方のものだと思ふと、何を言つても唯最うわな／＼震へるばかりで。弱らせ抜いたぜ。其方から尋ねるやうになればしめたものだ。此處は佃町よ、八幡様の前を眞直に蓬萊橋を渡つて、廣ツ場を越した處だ、可いか、私は早船の船頭で七兵衛と謂ふのだ。」

「あの蓬萊橋を渡つて、おや、然う、」と考へる。

「然うよ、知つてるか、姉やは近所かい。」

「はい。否、」といつてフト口をつぐんだ。

船頭は胸で合點して、

「まあ、可いや、お前の許は構はねえ、お前の方にさへ分れば可いわ、佃町を知つてゐるかい。」

稍あつて、

「あの、いつか通つた時、私くらゐな年紀の、綺麗な姉さんが歩行いて居なすつた、彼處なんでせう、然うでございますか。」

「待たツせよ、お前くらゐな年紀で、と、恚うと十六七だな。」

「はあ、」

「十六七の阿魔はいくらも居るが、綺麗な姉さんは餘りねえぜ。」

「否、みますよ、丸顔のね、髪の毛の澤山ある、而して中形の浴衣を着て、赤い襦袢を着てみました、屹とですよ。」

「待ちねえよ、赤い襦袢と、それぢやあ、お勤が家に居る年明だらう、ありやお前もう三十位だ。」

「否、若いんです。」

七兵衛天窓を掻いて、

「困らせるの、年月も分らず、日も分らず、薩張見當が着かねえが、」と頗る弱つたらしかつたが、は

たと膝を打つて、

「あゝ／＼居た／＼、居たが何、ありや賣物よ。」

と言つたが、菊枝には分らなかつた。けれども記憶を確めて安心をしたものと見え、

「然う、」と謂つた聲がうるんで、少し枕を動かすと、顔を仰向けにして、目を塞いだが又た涙ぐんだ。我に返れば、さま／＼のこと、さま／＼のことは唯うら悲しきのみ、疑も恐もなくつて泣くのであつた。

髪も揺めき蒲團も震ふばかりであるから、仔細は知らず、七兵衛は然こそとばかり、

「何うした、え、姉や何うした。」

問慰めると漸々此方を向いて、

「親方。」

「おゝ、」

「起きませうか。」

「何、起きる。」

「起きられますよ。」

「占めたな！ お前じつとしてる方が可いけれど、些とも構はねえけれど、起られるか、遣つて見る一番、然うすりやしやん／＼だ。氣さへ確になりや、



何なにお前めえ案あんじるほどの容やう體たいぢやあねえんだぜ。」と、  
七兵衛べへいは孫まごをつかまへて歩あ行んは上じ手やうの格かくで力ちからをつけ  
る。

蒲團ふとんの外そとへは顔かほばかり出だして居ゐた、裾すそを少すこし動うご  
かしたが、白しろい指ゆびをちらりと夜具やぐの襟えりへかける  
と、顔かほをかくして、

「私わたし、

」

「大事ねえ／＼、水浸しになつて居た衣服はお前あの通だ、聞かつせえ。」

時に絶えず音するは静な臺所の点滴である。

「あんなものを巻着けて置いた日にやあ、骨まで冷抜いて了ふからよ、私が襦袢を枕許に置いてある、誰も居ねえから起きるなら此處で引被けねえ。」

といったが克明な色面に顕れ、

「おゝ、そして何よ、憂慮をさつしやるな、何うもしねえ、何ともねえ、俺あ頸許にも手を觸りやしねえ、胸を見な、不動様のお守札が乗つけてあら、そのの、ほうら、」

菊枝は嬉しさうに血の氣のない顔に淋しい笑を含んだ。

「むゝ、」と頷いたがうしろ向になつて、七兵衛は口を尖がらかして、鍋の底を下から見る。

屏風の上へ、肩のあたりが露れると、潮たれ髪はなほ乾かず、動くに連れて柔かにがつくりと傾くの

を、軽く振つて、根を壓へて、

「之を着ませうかねえ。」

「洗濯をしたばかりだ、船蟲は居ねえからよ。」

緋鹿子の上へ着たのを見て、

「待つせえ、生憎襷がねえ、私が此の一張羅の三尺

ぢやあ間に合ふめえ！と、可からう、合したものゝ

上へしめるんだ、濡れて居ても構ふめえ、どツこい  
しよ。」

七兵衛は二三のやうな足つきで不行儀に突立つと

屏風の前を一跨、直に臺所へ出ると、荒繩には秋の

草のみだれ咲、小雨が降るかと霧かゝつて、帯の端

衣服の裾をしたノノと落つる雫も、萌葱の露、紫

の露かと見えて、慄然とする朝寒。

眞中に際立つて、袖も襟も萎へたやうに懸つて居

るのは、斧、琴、菊を中形に染めた、朝顔の秋のあ

はれ花も白地の浴衣である。

昨夜船で助けた際、菊枝は裕の上へ此の浴衣を着

て、其上に、菊五郎格子の件の帯上を結んで居たの

で。

謂は何か是にこそと、七兵衛は其時から怪んで今

も眞前に目を着けたが、まさかに之が死神で、菊枝

水を導いたものとは思はなかつたであらう。

實際お縫は葛籠の中を深して驚いたのも是、眉を  
顰めたのも是がためであつた。斧と琴と菊模様の浴  
衣こそ菊枝をして身を殺さしめた怪しの衣、女が歌  
舞伎の舞臺で、姿を見て寐覺にも、倂の忘れ  
ぬ、あこがるゝばかり鼻肩の俳優、尾上橘之助が、  
白菊の辭世を讀んだ時まで、寐返りもまゝならぬ、  
病の床に肌につけた記念なのである。

江崎のお縫は芳原の新造の女であるが、心懸がよ  
くツて望んで看護婦になつた位だけれども、橘之助  
に附添つて嬉しくないことも無いのであつた。

然るに重體の死に瀕した一日、橘之助が一輪ざし  
に菊の花を活けたのを枕頭に引寄せて、嘗て止ごと  
なき 某 侯爵夫人から領したと云ふ、淺緑と名の  
ある名香を、お縫の手で焚いて貰ひ、天井から釣し  
た氷嚢を取除けて、空氣枕に仰向けに寝た、素顔は  
舞臺の其よりも美しく、蒲團も搔卷も眞白な布を以  
つて蔽へる中に、目のふちの稍蒼ざめながら、額に  
かゝる髪の毛の艶、あはれうらわかき神のまぼろしが梨  
園を消えようとする時の風情。

橘きつ之の助すけは垢あかの着つかない綺麗きれいな手てを胸むねに置おいて、香かうの薰かきりを聞きいて居ゐたが、一縷いちるの煙けむりは二條ふたすぢに細ほそく分わかれ、尖さきがさゞ波なみのやうにひら／＼と、靡なびいて枕まくらに懸かつた時とき、白菊しろきくの方ほうに枕まくらを返かへして横よこになつて、弱々よわ／＼しう襟えりを左さ右みぎに開ひらいたのを、何どうなさいます？ とお縫ぬいが尋たづねると、勿體もちたいないが汗臭あせくさいから焚たきき占しめませう、と病苦びやうくの中なかに謂いつたと謂いふ、香かうの名な残ごりを留とめたのが、即すなはち此處こゝに在ある記念かたみの浴衣ゆかた。

懐なつかしくも床ゆかしさに、お縫ぬいは死骸しがひの身みに絡まとつた殊ことに其それが肺結核はいけつかくの患者かんじやであつたのを、心得こころえある看護婦かんごふでありながら、記念かたみにと謂いつて強しひて貰もらひ受うけて來きて葛籠つづらの底そこ深く秘ひめ置おいたが、菊枝きくえが豫かねて橘之助きつすけの鼻ひい眞まで、番附ばんつけに記しるした名なばかり見みても顔色かほいろを變かへる騒さわぎを知しつてたので、昨夜さくや、不動様ふどうさまの參詣さんけいの歸かへりがけ、年とし紀した下したながら仲なかよしの、姉ねえさんお内うちかい、と寄よつた折をりも、何なには差置さしおき橘之助きつすけの噂うはさ、お縫ぬいは見みたまゝを手てに取とるやう。

これ／＼恚かう、恚かういふ浴衣ゆかたと葛籠つづらの底そこから取とり出すと、まあ姉ねえさんと進すすむる膝ひざ、灯あかりとゝもに乗のり出す膝ひざ

を、突合した上へ乗せ合つて、爾時は恚ういふ風、  
佛におなりの前だから、優しいばかりか、目許口付、  
品があつて氣高うてと、お縫が謂へば、ちら／＼と、  
白菊の花、香の煙。

話が嵩じて理に落ちて、身に沁みて涙になると、  
お縫はさすがに心付いて、鮫を驕りませうといつて  
戸外へ出たのが、葦の湯の騒ぎをつい見棄てかねて  
取合つて、時をうつして居た間に、過世の深い縁で  
あらう、淺緑の薫のなほ失せやらぬ橘之助の浴衣を  
身につけて、跣足で、亡き人のあとを追つた。  
菊枝は屏風の中から、ぬれ浴衣を見てうつとりし  
て居る。

七兵衛は然りとも知らず、  
「何うぢやしめるものは此の扱帯が可いかの。」  
じつと凝視めたまゝ、

だんまりなり。  
「ぐる／＼巻にすると可い、何うだ。」  
「はい取つて下さいまし、」と漸といつたが、世馴  
れず、両親には甘やかされたり、大恩人に對し遠慮  
の無さ。

七兵衛は其を莞爾やかに、

「そら、此奴あ單衣だ、もう雲の垂るやうなことはねえ。」

やがて、つく／＼と見て苦笑ひ、

「ほ／＼生れかはつて娑婆へ出たから、争はねえ、島田の姉さんがむつぎにくるまつた形になつた、は／＼縫上げをするやうに腕を恚うぐいと遣らかすだ、然う、然うだ、其處で坐つた、と、何ともないか。」

「此處が痛うございますよ。」と兩手を組違へに二の腕をおさへて、頭が重さうに差俯向く。

「む／＼、然うかも知れねえ、昨夜然うやつて確乎胸を抱いて死んでたもの。丁ど痛むのは手の下になつてた處よ。」

「然うでございますか、あの私は恚うやつて一生懸命に死にましたわ。」

「此の女は！一生 懸命に身を投げる奴があるものか、串戯ぢやあねえ、而して、どんな心持だつた。」

「あの沈みますと、茫乎して、すつと浮いたんですわ、其時に恚うやつて少し足を縮めましたつけ、又た沈みました、其からは知りませんよ。」

「やれ／＼苦しかつたらう。」

「否、泣きたうございました。」

記念ながら

十四

二ツ三ツ話の口が開けると老功の七兵衛少とも透さず、

「何しろ娑婆へ歸つて先づ目出度、其處で嬰兒は名は何と謂ふ、お花か、お梅か、それとも。」

「えゝ、」といひかけて菊枝は急に黙つて了つた。様子を見て、七兵衛は氣を替へて、

「可いや、まあそんなことは。處で、粥が出来たが一杯何うぢや、又ぐつと力が着くぜ。」

「何にも喰べられやしませんわ。」と膠の無い返事をして、菊枝は何か思出して又「然とするのである。」

「其も可いよ。はゝ、何か謂はれると氣に障つて煩いな？ 可いや、可いやお前になつて見りや、盆も正月も一齋ぢや、無理はねえ。」

其では御免蒙つて、私は一膳遣附けるぜ。鍋の

底はじり／＼いふ、昨夜から氣を揉んで酒の蟲は揉殺したが、矢鱈無上に腹が空いた。」と立つたり、

居たり、歩行いたり、果は胡坐かいて能代の膳の低



いのを、毛脛へ引挟むが如くにして、紫蘇の實に  
糖蝦の鹽辛、疊み鰯を小皿にならべて菜ツ葉の漬物  
堆く、白々と立つ粥の湯氣の中に、眞赤な顔を  
て、熱いのを、大きな五郎八茶腕でさら／＼と掻食  
つて、掻食ひつゝ菊枝が支へかねたらしく夜具に額  
をあてながら、時々吐息を深くするのを、茶腕の上  
から流に密と見ぬやうに見て釣込まれて肩で呼吸  
思出したやうに急がしく掻込んで、手拭の端でへ  
の字に皺を刻んだ口の端をぐいと拭き、差置いた箸  
も持直さず、腕を組んで傾いて居たが、臺所を見れ  
ば引窓から、門口を見れば戸の隙から、早や九時十  
時の日ざしである。此のあたりこそ氣勢もせぬが、  
廣場一ツ越して川端へ出れば、船の行交ひ、人通り、  
煙突の煙、木場の景色、遠くは永代、新大橋、隅田  
川の模様なども、同一時刻の同一頃が、親仁の胸に  
描かれた。

「姉や、姉や、」と改めて呼びかけて、僅に身を動  
かす背に手を置き、  
「道理ぢや、善いにしろ、悪いにしろ、死なうとま  
で思つて、一旦水の中で引取つたほどの昨夜の今ぢ  
や、何か話しかけられても、胸へ落着かねえで却つ

て頭痛でもしちやあ悪いや、な。だから私あ何にも  
謂はねえ。

一體昨夜お前を助けた時、直ぐ騒ぎ立てればよ、汐  
見橋の際には交番もあるし、然うすりや助けようと  
思ふ念は届くし此方の手は抜けるといふもんだし、  
其に上を越すことは無かつたが、いや／＼然うでね  
え、川へ落ちたか落されたか其とも身を投げたか、  
能く見れば様子で知らあ、お前は覺悟をしたもの  
だ。

覺悟をするには仔細があらう、辛いことか悲しい  
ことか、其處ン處は分らねえが、死なうとまでした  
ものを、私が騒ぎ立つて、江戸中知れ渡つて、捕つ  
ちやあならねえものに捕るか、會つちやあならねえ  
ものに會つたりすりや、餘計な苦患をさせるやうな  
ものだ。「七兵衛は口輕に、  
」と恚う思つての、密と負つて來て届かねえ介抱を  
して見たが、いや半間な手が届いたのもお前の運よ、  
こりや天道様のお情といふもんぢや、無駄にしては  
相濟まぬ。必ず輕忽なことをすまいぞ、むゝ姉や、  
見りや兩親も居なさらうと思はれら、まあ能く考へ  
て見さつせえ。

其處で胸を静めてじつと腹を落着けて考へるに、  
私が傍に居ては氣を取られてよくあるめえ、直ぐに  
これから仕事に出て、蝸牛の殻をあけるだ。可  
しか、棧敷は一日貸切だぜ。」

「起きようと寐ようと勝手次第、お飯を食べるなら、冷飯があるから茶漬にしてやらつせえ、水も一手桶汲んであら、可いか、而してまあ緩々と思案をするか。」

思案をするぢやが、短気な方へ向くめえよ、後生だから一番方角を暗剣殺に取違へねえやうにの、何とか分別をつけさつせえ。

幸福と親御の處へなり又た伯父御叔母御の處へなり、歸るやうな氣になつたら、私に辭儀も挨拶も入らねえからさつさと歸りねえ、お前が知つてるといふ蓬菜橋は、廣場を抜けると大きな松の木と柳の木が川ぶちにある、其間から斜向に向うに見えらあ、可いかい。

又た居ようと思ふなら振方を考へるまで二日でも三日でも居さつせえ、私ん處は些とも案ずることはねえんだから。

其内に思案して、明して相談をして可いと思つたら、謂つて見さつせえ、此の皺面あ突出して成ることなら素ツ首は要らねえよ。

私あ染々可愛くなつてならねえわ。

それからの、此處に居る分にやあうつかり外へ出  
めえよ、實は、

と聲を密めながら、

「此處等は廓外で、お物見下のやうな處だから、  
いや遣手だわ、新造だわ、其の妹だわ、破落戸  
の兄貴だわ、口入宿だわ、慶庵だわ、中にやあお前  
勾引をしかねえやうな奴等が出入をすることがあ  
るからの、飛んでもねえ口に乗せられたり、猿轡を  
嵌められたりすると大變だ。」

それだから恚うやつて、夜夜中開放しの門も閉め  
て置く、分つたかい。家へ歸るならさつさと歸らつ  
せえよ、俺にかけかまひは些ともねえ。ぢやあ、俺  
は出懸けるぜ、手足を伸して、思ふさま考へな。」

と返事は強ひないので、七兵衛はづいと立つて、  
七輪の前へ來ると、蹲んで、力なげに一服吸つて三  
服目をはたいた、駄六張の眞鍮の煙管の雁首をかへ  
して、突いて火を寄せて、二ツ提の煙草入にコツン  
と指し、手拭と一所にぐいと三尺に挟んで立上り、  
つか／＼と出て、未だ雫の止まぬ、びしよ濡の衣を  
振返つて、憂慮げに土間に下りて、草履を突かけた

が、立淀んで、やがて、其の手拭を取つて頼被。七  
 兵衛は勝手の戸をがりと開けた、臺所は晝になつ  
 て、唯見れば、裏手は一面の蘆原、處々に水溜、  
 これには晝の月も映りさうに秋の空は澄切つて、赤  
 蜻蛉が一ツ行き二ツ行き、遠方に小さく、釣をする  
 人のうしろに、ちら／＼と帆が見えて海から吹通し  
 の風颯と、濡れた衣の色を亂して記念の浴衣は揺め  
 いた。親仁はうしろへ伸上つて、其まゝ出ようとす  
 る海苔粗朶の垣根の許に、一本二本咲をくれた嫁菜  
 の花、葦も枯れたに這はあはれと、ちつと見る時、  
 菊枝は聲を上げてわつと泣いた。

\* \* \* \* \*  
 \* \* \* \* \*  
 \* \* \* \* \*  
 \* \* \* \* \*  
 \* \* \* \* \*

「妙法蓮華經如來壽量品第十六自我得佛來所經  
 諸劫數無量百千萬億載阿僧祇。」

川下の方から寂として聞えて来る、あたりの人の  
 氣勢もなく、家々の灯も漏れず、流は一面、岸の柳  
 の枝を洗つてざぶり／＼と音する中へ、菊枝は兩親  
 に許されて、髪も結び、衣服も故と同一装で、お縫  
 が附添ひ、身を投げたのは此處からといふ蓬萊橋か

ら、記念の浴衣を供養した。七日経つて丁度 橘之助が命日のことであつた。

「菊ちゃん、」

「姉さん、」

二人は顔を見合せたが、涙ながらに手を合せて、

捧げ持つて、

「南無阿彌陀佛、」

「南無阿彌陀佛。」

折から洲崎の何の樓ぞ、二階よりか三階よりか、

海へ颯と打込む太鼓。

浴衣は静に流れたのである。

菊枝は活々とした女になつたが、以前から身に添へて居た、菊五郎格子の帯揚に入れた寫眞が一枚、それに朋輩の女から、橘之助の病氣見舞を紅筆で書いて寄越したふみとは、其の名の菊の枝に結んで、  
今年は二十。

【完】